

# アメリカ・ユダヤ人とブランダイス大学

——「社会的正義」のホームとしての可能性

北 美幸

はじめに

今から五〇年前の一九六三年八月二八日、いわゆるワシントン大行進の際にマーティン・ルーサー・キング(Martin Luther King, Jr.) 牧師が行った演説「私には夢がある」は、人種の平等と差別の撤廃を訴える公民権運動の最高の到達点として知られる。そして、同じ日の同じ会場で、ユダヤ教のラビ(聖職者)であるヨアキム・プリンツ(Joachim Prinz)は、キング牧師に先立って演説を行った。彼は、「ナチス政権下のドイツでラビをしていた者として」、最も恥ずかしく悲劇的なことは偏狭や憎悪に対して沈黙・傍観することだと説き(Meyer 2008: 261)、ユダ

ヤ人の歴史的経験と黒人のそれを結びつけたのであった。

アメリカ・ユダヤ人は、公民権運動あるいは黒人の権利獲得に比類なき積極的姿勢を見せたことが知られている。先行研究によると、国の人口に占めるユダヤ人の割合は約

三パーセントであるのに対し、ポランテアとして公民権運動に参加した白人の半分から三分の二がユダヤ人であったと言われる(Garza 1995: 149)。一九六四年六月には、

三人の公民権活動家がミシシッピ州で黒人教会の焼き討ち事件の調査に出かけたまま行方不明となり人種差別主義者により殺害される事件が起こったが、うち白人である二人はニューヨーク出身の若いユダヤ人だった(Kaufman 1995: 15-17)。この痛ましい事件は、ノンフィクション映画『ミシシッピ・バーニング』(アラン・パーカー監督作品、一九八八年)として、国際的にも人々の記憶に残る

こととなった。

本稿では、アメリカ合衆国で初めてで唯一の世俗的ユダヤ人大学であるブランダイス大学の学生・教員の公民権運動への関わりをみる。この時期のブランダイスの学生は約八五パーセントがユダヤ人であったが、数的なことだけが同大学を取り上げた理由ではない。ユダヤ人たちが展開してきた教育における差別や人種隔離に対する闘いおよび大学設立の経緯から、一九四〇年代から一九六〇年代あるいは現在にまでいたる彼らの信念の連続が見られることが予想されるのである。結論をやや先取りすれば、ブランダイス大学は、アメリカ・ユダヤ人が抱いた「差別のない」「社会的正義」の理想を実現する基地（ホーム）としての役割を担ったといえるのではないか。

本稿ではまず、ブランダイス大学の設立の経緯とその建学の精神を検証する。続いて、学生たちの公民権運動への参加について、いくつかの事例を紹介する。さらに、同大学におけるアフリカおよびアフロ・アメリカン研究学科設置の経緯についても述べる。以上を、主に一次史料として同大学の学生新聞『正義 (Justice)』を用いながら明らかにする。

## I ブランダイス大学の創設とその精神

### 1 アメリカ合衆国におけるユダヤ系高等教育機関の歴史的展開と「割当制」の問題

一九四八年一〇月、マサチューセッツ州ウォールサムに、ユダヤ人の支援による世俗的大学 (Jewish-sponsored secular university) であるブランダイス大学が開学した。

「人民の弁護士」として名高く、アメリカ・ユダヤ人として初の連邦最高裁判事となったルイ・ブランダイス (Louis D. Brandeis) の名を冠し、開学後わずか五年でニューヨークランド大学協会からの正式認定を受けた、大学院博士課程までを持つ学術的にも極めてレベルの高い大学である。

ブランダイス大学の設立は、ユダヤ人たちにとって、長いこと夢見ては破れての繰り返しの末のことであった。実際、一九世紀の中頃から、さまざまな形でユダヤ人向けの高専教育機関の設立が試みられてきた。一八六七年には、フィラデルフィアにマイモニデス大学が設立されたが、同大学は一八七三年に閉校してしまった。その後、一八七五年にヘブル・ユニオン・カレッジがシンシナチに、一八八七年にジュレイツシュ・セオロジカル・セミナリー・オ

ブ・アメリカがニューヨークに設立された(羽田 一九九三・二〇五)しかし、これらは小規模なラビ養成学校でユダヤ学の科目がほとんどであった。カトリックやプロテスタントの各派が設けたような平信徒のための大学は設立されず、計画もなかった。

ユダヤ人大学の設立に対する一番の懸念は、非ユダヤ人からの差別であった。一八八〇年代、いわゆる「新移民」の一部として東欧系ユダヤ人の大流入が始まり、アメリカ合衆国に居住するユダヤ人の数は一八八〇年の二五万人から一九二四年の四二〇万人へと激増した(野村一九九五・二二)。この数的な膨張、また、新着の移民には正統派のユダヤ教徒が多く、服装や言語・生活習慣など、視覚的にも目立つ存在であったことから、大都市部を中心に国全体で急激に反ユダヤ主義が高まっていた。

こうして、コロンビア大学やニューヨーク大学などユダヤ人学生数の多い大学は、一九一〇年代末には非公式にユダヤ人学生の入学を制限するようになった。一九二二年六月、ハーバード大学のローウェル (Abbott Lawrence Lowell) 学長は、ユダヤ人学生が不釣り合いに学生集団の中の高い割合を占めているという理由で、彼らの入学を制限する計画を発表した。ハーバード大学が「割当制」を導入するというニュースは、『ニューヨーク・タイムズ』紙の第一面で報道され、かなりの注目を集めた (New York

*Times* June 2, 1922)\*2。

一九二三年、『アメリカにおけるユダヤ人大学』と題したモノグラフの中で、ニューヨークのラビ、ルイ・ニューマン (Louis I. Newman) は、世俗的ユダヤ人大学設立の構想を発表した (Newman 1923)。しかし、彼の提案は受け入れられず、実を結ぶことはなかった。一校あるいは何校かを設立したところで、差別に遭ったユダヤ人の若者を受け入れるには、ほとんど解決にならないと考えられたのである。あるいは、ユダヤ人で大学を作るということは、学問の場にゲッターを作りユダヤ人が孤立してしまうことだと主張する者も多かった (*Jewish Tribune* Oct. 27, 1922)。

## 2 第二次世界大戦後の展開

第二次世界大戦の終結は、ユダヤ人大学の設立に向けての新たな契機となった。若者たち、とくに復員兵たちは平和な時代に将来への思いを馳せ、今までにないほど教育を求めた。高等教育機関在籍者の数は、一九四四年の一五万五〇〇〇人から四六年には一六七万七〇〇〇人、さらに四八年には二六一万六〇〇〇人へと飛躍的に増加したが、その拡大の大部分は復員軍人援護法の教育給付特典を利用した復員軍人であった(中島・池田 一九七八・八四―八五)。

ユダヤ人のリーダーたちは、ユダヤ人大学設立の夢を實現できないかと改めて可能性を模索し始めた。この計画の實現の先頭に立ったのが、国内で最も影響力の大きい保守派ユダヤ教会のラビであり、後にアメリカ・ユダヤ人会議の会長となるイスラエル・ゴールドスタイン (Israel Goldstein) であった。

一九四六年一月、授業停止状態に陥っていたミドルセツクス大学の敷地と設備を利用して世俗的ユダヤ人大学を設立する計画が開始された。そもそも、同大学が授業停止状態に陥った理由も複雑であった。確かに同大学は、資金や設備面での問題を抱えており、卒業生は、マサチューセツ州以外の医師資格試験を受験することができなかった。

さらに一九四四年からは、同州における受験資格も認められなくなっていた。一方、学長のラッグルズ・スミス (C. Ruggles Smith) は、米国医師会およびマサチューセツク医療協会による医師資格認定の拒絶自体が、人種・宗教による差別・いやがらせであると主張していた。実際、一九四四年に在籍していた三〇〇人の学生のうち、八五パーセントがユダヤ人であった (Goldstein 1961: 14, 17)。

一月十五日、スミスからの手紙を受け取ってからわずか一週間後、ゴールドスタインはミドルセツクス大学のキャンパスを訪れた。彼は、傷んだ建物やその内装、手入れがされておらず雑草の伸びたグラウンドとともに、ウォルサ

ム市とチャールズ川を一望できる立地に深い感銘を受けた。そして「このキャンパスは本来的に偉大なるユダヤ人大学の敷地として価値のあるものである」と述べ、この地に大学を設立することを決意したのだった (Goldstein 1961: 20)。

しかしながら、ユダヤ人大学の設立に対する否定的な意見は根強かった。反対派の人々は、「ユダヤ人はユダヤ人の大学に行けばよい」という差別的言い逃れの口実を与えることで、他大学におけるユダヤ人差別が悪化するのではないかと心配した。また、ユダヤ人大学を設立するということは、国内における集団としてのユダヤ人の存在を否応なく目立たせることになるものだった。

### 3 「差別を行わない」大学として

一九四六年六月、シカゴで開催された全国コミュニティ関係諮問会議の席上、ゴールドスタインは在米ユダヤ人団体の代表らに向かって次のように言った。

言うまでもなく、それを撲滅するためにはあらゆる努力がなされなければなりません。それはたとえ、割当制を行っている機関を公衆の批判にさらすのであるとか、裁判所は認めないであろうけれども、それらの

機関の免税措置を取り除くように訴えるとか、さらに多くの州立大学の設立の構想を練るとか、そういうことです。アメリカ人として、我々は高等教育の領域から非アメリカ的な方針を取り除く努力をする権利と義務があるのです。しかし、その努力がどの程度成功するのか、あるいはどのくらいの時間がかかるのかは全く分かりません。(中略)

少なくとも、私が代表をつとめる光栄を有しているユダヤ人の支援による大学を支持している人々は、学生や教員をユダヤ人に限定することは提案していません。提案しているのは、学生と教員を選抜する唯一の基準を能力にする、非割当の大学 (non-quota university) なのです。(Goldstein 1951: 127-128)

翌日、総会は「人種、肌の色、信条にかかわらず全ての人に開かれたユダヤ人大学、およびユダヤ人の援助のもとにある高等教育機関を合衆国内に設立し、拡大する最近の動きを、満足をもって承認」した (Goldstein 1951: 58)。こうして、ゴールドスタインおよび彼の支援者たちは、「ユダヤ人のユダヤ人によるユダヤ人のための大学」ではなく、「ユダヤ人が資金提供をする、差別のない大学」をアメリカの地に作ることを提唱することで、「ユダヤ人大学」のかかえる矛盾を解消したのだった。

一九四八年五月、エイブラム・サッカー (Abram Sachar) が初代学長に就任し、一〇月には一〇七人の学生と一三人の教員で授業が開始された。大学では、非差別の方針が曲げられることはなかった。ブランダイスは当初から黒人学生を入学させた。一九五二年には、約四〇〇人の学生のうち少なくとも八人が黒人であり、教員一人も黒人であった (Ebony, Feb. 1952: 59)。また、非宗派性ということに関しても、一九五五年までにユダヤ教、プロテスタント、カトリックの三つの礼拝所が構内に設けられた (Guerrard 1956: 535<sup>4</sup>)。

ブランダイスは、知的な探究心と討論に満ちた場を醸成していった。一九五六年には、「人種・信条および国籍による分断と障壁をなくすための」講義シリーズが開始され、さまざまな分野の講師が招聘された。その中には、ロイ・ウィルキンス (Roy Wilkins) やラルフ・アバナシー (Ralph Abernathy)、アンドリュー・ヤング (Andrew Young) やケネス・B・クラーク (Kenneth B. Clark) といった黒人の著名人や公民権運動家が含まれていた (Pasternack 1988: 133-134)。キング牧師も一九五七年と一九六三年にブランダイスを訪れ、人種間の正義と非暴力について講義を行った (Justice Apr. 9, 1957; Feb. 26, 1963)。

## II ブランダイス大学と公民権運動

「差別を行わないこと」に対して妥協を見せない大学の姿勢に影響され、ブランダイスの学生たちは、政治的・社会的活動に打ち込むようになった。一九五〇年代の初めには、全国黒人地位向上協会 (National Association for the Advancement of Colored People = NAACP) の支部が大学に設立された。一九六〇年代に入ると、ブランダイスの学生・教員・卒業生は、キャンパスで、ポストンで、そして南部で活動した。

### 1 座り込み運動とポストン地域 ウールワース店舗でのピケ

ウールワースという、全国にチェーン展開するドラッグストアがあった。一九六〇年二月、そのノースキャロライナ州グリーンズボロの支店のランチ・カウンターで、人種隔離されていない施設で食事をできる権利を求めて、「座り込み (SIT) 運動」が開始された。この運動は、ノースキャロライナ州立農工大学の黒人学生たちが給仕を拒まれたことにより開始され、瞬く間に他の南部の黒人大学に

広まっていった。

ポストンでは、二月二三日に開催された NAACP の会合の際、この座り込み運動を支援する組織を設立するために五つのグループの代表者が集まった。NAACP、人種平等会議 (Congress of Racial Equality = CORE)、ブランダイス、ハーバード、そしてクエーカー・フレンスズであった。組織は、緊急公共統合委員会 (Emergency Public Integration Committee = EPIC) と名付けられた。

EPIC はポストン周辺のウールワースの店舗前でピケを張り、その南部の店舗における差別の方針に抗議することに決めた。ブランダイスからは、約七五人の学生が二月二七日に行われたピケに初めて参加した。グループは四つの班に分かれ、それぞれが、ブルックラインからニュートン近辺の地域を担当した。午後一時に大学を出発し、それぞれの目的地へ向かい、二時から四時または四時半までピケを張った。学生たちは、CORE の非暴力方針に則り、店舗の前で小冊子を配布した (Justice Mar. 1, 1960)。

学生たちは、毎週土曜日にピケを続けた。ある時、彼らは、交通が麻痺するほどの吹雪の中でピケを敢行した。三月には、中間試験の最中にもピケを行った。その間も EPIC は組織として大きくなっていった。ブランダイス、ハーバード、マサチューセッツ工科大、ポストン大学の学生グループに加えて、労働組合、教会、退役軍人のグルー

ブも参加するようになり、会員は四〇〇人を超えた (*Justice* Mar. 22, 1960)。

E P I C は、一九六〇年の春の間ピケを張り続けた。ブランドアイスからの参加者は一〇〇人以上に増えた。四月には、ピケはベルモント、レキシントン、ウエルズレー、ニュートンビルの店舗にまで広がった。多くの店舗において、少しずつであるが確実に売り上げが落ちてきた。店舗のマネージャーたちは、事態を深刻にとらえるようになり、とうとう本社に、南部の店舗での差別的方針を改めるよう要望を出した (*Justice* Apr. 5, 1960)。

サッカー学長は、三月二日に『正義』紙上で、学生たちの活動を支持する旨を発表した。彼は、「教育者として私は、学生たちが時には罵声を浴びながらも、この重要な社会問題のために時間とエネルギーを注いでいることを喜ばしく思う」と表明した (*Justice* Mar. 22, 1960)。

E P I C は、一九六〇年の学年度が終わるまでポストン地域の二三のウールワースの店舗でピケを展開した。参加者の数は少なくなったものの、大学に残った者たちは六月と七月にもピケを続けた。八月までに、六九の南部のウールワースの店舗が人種統合され、本社は、未だ人種隔離を行っている残りの店舗についても統合する計画を作成した。ウールワースがすべての店舗の人種統合を行うと誓ったので、E P I C はピケをやめることを一九六〇年九月に

投票により決定した (*Justice* Sep. 27, 1960)。

## 2 自由のための断食

学生たちの運動は、座り込み運動の支援にとどまらなかった。翌一九六一年、学生たちは、長距離バスの車内やターミナルでの人種隔離撤廃を目指す「自由のための乗車運動 (フリーダム・ライド)」を支援した。六月一日、およそ一五〇人が学生会館で本のバザーを行った (*Justice* June 9, 1961)。また、政治学科准教授のウィリアム・ゴールドスミス (William Goldsmith) は、他の数人の教員とともにファカルティ・ショーとして寸劇や音楽を披露し、寄付を募った。集められた金は、逮捕されたフリーダム・ライダーたちの保釈金の一部に充てられた (*Justice* May 8, 1962)。また、ブランドアイスで始まり、全国に広まった活動もあった。本節ではその活動、「自由のための断食」を扱いたい。

「自由のための断食」は、一九六三年五月に行われたキング牧師による一万人大行進の副産物であった。行進に参加したブランドアイスの学生が、ミシシッピでは選挙の有権者登録を巡って暴力的な衝突が頻発していること、連邦の食糧供給プログラムにより配給される食糧が不足していることを知り、計画を開始したのだった。

二年生のウィリアム・カスペ (William Caspe) が、計画の実行のため、「北部学生運動 (Northern Student Movement = NSM)」の支部をブランダイスに設立した。断食は、早速、五月三日の夕方に設定された。カスペと友人たちは、食事・飲み物を一食抜く計画への賛同を求めて回った。参加する学生は、前もって食事一回分の代金を学生食堂に支払い、食事をしないことを表明した。NSMはその代金で小麦粉や穀物など常備食品類を購入し、ミシシッピ州およびアラバマ州の学生非暴力調整委員会 (Student Nonviolent Coordinating Committee = SNCC) とCOREの配給センターへと送った (Justice May 14, 1963)。

「自由のための断食」は、最初からブランダイスでは大成功であった。実に六〇〇人以上が夕食を抜いた。集められた金は四五〇〇ポンドの食糧に変えられた (Justice May 14, 1963)。二度目の断食が実施されるまでの間に計画は全国に広がっていた。NSMは二八〇校以上の大学と連絡を取り、参加を要請した。大学以外にも、NAACP、SNCC、COREなど主要な公民権団体のすべて、また、ブネイ・ブリス・ヒレル財団といったユダヤ教関連組織の支持を得た (Justice Feb. 11, 1964)。

こうして、「自由のための断食」はカスペが一九六五年に卒業するまでの間に計三回行われた。二度目の断食 (一

九六四年二月二十六日)には四二校、三度目の断食 (一九六四年一月三日)にはおよそ一五〇校が参加した。また、第三回目までに、ジョンソン (Lyndon B. Johnson) 大統領やキング牧師も活動への支持を表明した (Justice June 7, 1964; Nov. 24, 1964)。

以上のように、ブランダイスの学生たちは、他の組織や大学で開始された活動に参加するだけでなく、自ら全国規模の活動を興した。なお、NSMは、一九六四年頃から活動の中心をボストンの公立学校における「事実上の (de facto) 人種分離」の解消に移した。ボストンの黒人コミュニティの中心であるロックスベリーにおいて、学生たちは子どもたちのキャンプや公園遊びの指導者になったり、勉強を教えたりした。

### 3 南部へのフィールド・ワーカー

ブランダイスの学生や教員の中には、マサチューセッツを離れ、南部の州まで出かけて行った者もいた。彼らはデモ行進や座り込み、学習会に参加した。また、夏休みを利用して約二か月にわたり選挙権登録運動のボランティアとなった学生や卒業生もいた。また、ある教員は三年間大学を休職し、COREの活動家として南部に滞在した。個人的に参加した者も多く、正確な参加者の数を把握すること

は不可能であるが、一九六五年の夏には大学からまとまった数の学生がサウスキャロライナ州に行っており、ある程度の詳細をつかむことができる。

その団体は、南部キリスト教指導者会議 (Southern Christian Leadership Conference = SCLC) のもとに組織された「夏期コミュニティ組織および政治教育 (Summer Community Organization and Political Education = S.C.O.P.E.)」であった。これは、前年にミシシッピで行われた S.N.C.C 主導のプログラム「フリーダム・サマー」と似たものであり、全国各地の大学で選ばれた参加者をフロリダ、アラバマ、ジョージア、バージニアといった南部の州の八〇の郡に派遣するものであった。各大学からの反応は好意的であり、最終的に S.C.O.P.E は一〇〇〇人が参加する一〇週間の大掛かりなものになった。内容としては、識字率向上および投票権登録運動と政治についての教育であった (Justice Mar. 9, 1965)。

ブランドイスでは、計画が発表されてすぐにキャンパス内に S.C.O.P.E の支部が設置され、アトランタの本部と連絡を取り合った。春学期の間、参加予定の学生たちは、大学内で会合を持った。南部に移動する前に、彼らは地方の権力の構造を学び、その地で起こったことについての過去の新聞記事を読み、コミュニティ内の人種関係と紛争の歴史について学んだ (Justice Apr. 13, 1965)。

ブランドイスからは、二三人の学生がサウスキャロライナ州の三つの郡で「夏を過した」 (Leventhal 2005: 518)。彼らは、三〇〇〇人分の投票権登録、劇場一軒とコインランドリー二軒の人種隔離廃止、そして、地元の人々が今後投票権登録活動を進めて行けるよう作業グループを組織するなどした (Justice Oct. 5, 1965)。カルフーン郡に派遣された一人の女子学生は、隣のオレンジバーグ郡の選挙登録の応援に出かけ、登録会場の裁判所でフリーダムソングを歌っていたことで逮捕され、留置場で一夜を明かした。また、白人至上主義団体ク・クラックス・クランにより、彼女と仲間たちの住んだ家の窓ガラスは銃で撃たれ、粉々になったという (Goldsmith 1968)。

このように、公民権運動のさまざまな場面において、ブランドイス大学は重要な働きをした。一九六三年一月にワシントン D.C で開催された「宗教と人種に関する学生指導者会議」に参加した学生は、次のように語った。「全体的な印象として、公民権の組織が学内にあり、学内に何の差別もないという点で、ブランドイスは実にユニークな大学だということを改めて感じた。私たちは主に、大学での差別の問題について話し合われている時は、受け取り学ぶ側というよりはむしろ、情報を提供する側であった」 (Justice Dec. 10, 1963)。

### Ⅲ ブランダイス大学における ブラック・ナシヨナリズム

#### 1 キング暗殺後

ロサンゼルス・ワッツ地区など各地での人種暴動、ストークリー・カーマイケル (Stokely Carmichael) による「ブラック・パワー」の声明は、一九六〇年代後半の人種関係の変化を示す象徴となった。黒人たちは、一九六四年公民権法および一九六五年投票権法の制定に満足しなかった。彼らは白人社会への統合ではなく、黒人としての自らの尊厳の確立を望んだ。非暴力の方針を放棄し、白人メンバーを追放する団体が現れた。

こういった人種関係の亀裂、あるいは再人種隔離の傾向は、ブランダイスのキャンパスにおいても観察された。一九六八年四月四日にキング牧師が暗殺された時、ブランダイス・アフロ・アメリカン・クラブは、黒人学生だけのための瞑想を構内のハーラン・チャペルで行った。同時に彼らは、大学が主催する追悼集会には参加しないことを決議した (Justice Apr. 9, 1968)。

キングの死後、マイノリティの利益をより目に見える形

で組み入れるよう要求する動きが、国全体においても、またブランダイスにおいても高まった。具体的には、アフリカ研究あるいはアフリカン・アメリカン研究専攻のコースの設置、マイノリティの教職員・学生の増員、キングとその功績を讃えての奨学金の設置、マイノリティの志願者向けの入試制度の実施などであった。

これらの要求の一部は、大学の努力により早い段階で実現された。一九六八年のうちに、高校卒業まで教育的に不利な環境にあった者に対し、大学の授業の履修と並行して英語や数学の補習授業を行う「移行年プログラム (Transitional Year Program = T.Y.P.)」が導入された。応募資格として人種は特定されていなかったが、入学事務責任者によると、T.Y.P.の開始により黒人学生の数は「かなり目立って増加」という (Justice Oct. 8, 1968)。また、黒人学生を対象とした「マーティン・ルーサー・キング奨学金」も設置された。

一方、他の要求については、なかなか進捗は見られなかった。とくに、要求事項の一番目に挙げられたアフリカおよびアフリカン・アメリカン研究学科の設立については、四月に教育方針委員会に要望が伝えられたものの、九月まで議論されることはなかった。こういった事情により、学生の間では、要求が実現に向かっていのか疑う声が上がっていた。

## 2 フォード・ホールの占拠とその後

一九六九年に入って間もなく、ブランダイスのキャンパスで騒擾が起こった。一月八日午後二時、ブランダイス・アフロ・アメリカン・クラブの学生約一五人が、前年四月に大学に提示した「一〇項目の要求」の実現を求めて、コンピュータ制御室のある建物、フォード・ホールを占拠したのである。当日の夜九時までに、立て籠もる学生の数はおよそ六五人まで増えた。<sup>5\*</sup>

立て籠もりはすぐには終わらなかった。実際それは一日間続き、大学全体を動揺させた。八日午後七時四五分、モリス・エイブラム (Morris Abram) 学長は、教授会が一五三対一八で黒人学生たちの行動を非難する決議を採択したと発表し、直ちに建物から去るよう呼びかけた (*Justice* Jan. 10, 1969)。やうに一日には、学生たちの威嚇的行動によって大学が方針変更を行うことはないとして正式に表明し、その旨を記した文書を同窓生や関係者に送付した (*Brandeis University, Office of the President* Jan. 13, 1969)。共感、恐れ、敵意、混乱など、さまざまに思いの人々は「マルコムXユニバーシティ」という垂れ幕が掲げられたフォード・ホールを見上げた。

とはいえ、黒人学生による建物の占拠やストライキ自体

は、この時期、国内の他所でも起こっていた。実際、フォード・ホールでの立て籠もりは、前年秋から黒人、ヒスパニック系、アジア系の学生によるストライキが多発していたサンフランシスコ州立大学で前日に起こった警察と学生の衝突事件に刺激されて始まったもので、同様の動きはニューヨーク市立大学クイーンズ・カレッジなどいくつかの大学でも起こっていた。

その意味で、ブランダイスにおける立て籠もり事件の特殊性は、白人学生たちの反応にあった。彼らは黒人学生を支援したのである。八日の夕方には五〇〇人が集会を開き、立て籠もっている学生たちに対する大赦を要求することを決議した。大学当局に提出された要望書には、全学生二六〇〇人のうち八九〇人が署名したという。また一四日には、黒人学生の要求の実現を求めて約三〇〇人が学長室のある建物の廊下に座り込み、二五人がハンガー・ストライキを開始した。一月二二日に始まる予定だった期末試験のボイコットにも、五〇〇人以上が賛同を表明した (*Justice* Jan. 14, 1969)。

結局、何一つ要求が受け入れられることなく、立て籠もりは終わった。一月一八日午後五時、およそ七五人の黒人学生たちがフォード・ホールの二階の非常用階段から外に出てきた (*Justice* Jan. 21, 1969)。

とはいえ、大学当局の対応は他大学とは異なっていた。黒人

学生に学科長選出の権限を与えるという要求は退けたものの、教授会は、一月二三日にはアフリカおよびアフリカン・アメリカン研究学科を設立する方向性を承認し、四月二四日には一九六九年秋の設置を正式に発表した (*Justice* Apr. 29, 1969)。しかし、ブランドアイスは、学生の圧倒的多数が白人でありながら、独立したアフリカン・アメリカン研究学科を極めて早い時期に持った大学の一つとなった。

## 結びにかえて——アメリカ・ユダヤ人の ホームとしてのブランドアイズ大学の可能性

本稿は、アメリカ合衆国で初めてかつ唯一の世俗的ユダヤ人大学であるブランドアイズ大学の創設の経緯とその精神、それに続く学生たちの公民権運動およびブラック・ナシヨナリズムへの関与について検証した。ブランドアイスは、ユダヤ人大学でありながら学生や教員をユダヤ人に限定も優先もしない方針を採った。また、学生たちは、マイノリティに対する差別を撤廃するための活動に積極的にコミットした。こうして同大学は、機会の平等と自由、正義という「アメリカの理想」に対するアメリカ・ユダヤ人の信念を、差別を行っている他大学あるいは国全体に示した

のだった。

さて、イスラエルの建国はブランドアイズ大学の開学と同じ一九四八年であるが、興味深いことに、アメリカ合衆国におけるシオニスト運動に対する賛否とユダヤ人大学の創設に対するそれは連動していた。早くは一九二二年、ニューマン・ラビがユダヤ人大学の設立を提唱した時には、ユダヤ人大学は「シオニストによる非アメリカ的行動の論理的最高点であり」、「必要なく、ユダヤ人とアメリカ人にとって有害である。根本的な誤解に基づいた考えである」(Newman 1983: 32-34)と断じられた。

しかし、創設賛成派は逆に、

反シオニストは、(中略)パレスチナにユダヤ人のホームや国家を建設することは、離散状態で住んでいる国家におけるユダヤ人の平等な権利のための闘いを放棄することを意味すると主張していたのだ。そこでシオニスト達は、ユダヤ人は抑圧のあるすべての国の個人やマイノリティ・グループに対する人道にかかった民主主義的な扱いのために闘うことにより、人類社会のために奉仕するのだと抗弁したのだ (Newman 1923: 48)。

と、シオニズムに普遍的な人道主義・民主主義が存すると

主張することによってユダヤ人大学の創設とシオニズムの両方を支持する発言を行った。実際、ゴールドスタインはシオニストであり、アメリカ・シオニスト機構の会長を務めたこともあった\*。

もともとシオニスト運動は、居住国家への忠誠心が強く同化程度の高いユダヤ人の間で忌避・非難されていたが、アメリカ合衆国においてもその傾向は同様であった。一八九七年にセオドア・ヘルツェル (Theodor Herzl) がスイスのバーゼルで第一回シオニスト会議を開催すると、アメリカ・ラビ中央評議会は、同年の年次大会において「ユダヤ人国家を建設しようとするいかなる試みにも反対する」、「ユダヤ教は政治的なものでもナショナルなものでもなく、精神的なもの」とする決議を採択した。二〇世紀に入ってから、アメリカ・ユダヤ人委員会も「我々は自らをネーションとはみなさない。我々は宗教共同体である……それゆえパレスチナへの帰還も……ユダヤ人国家に関するいかなる法の再生にも期待していない」として、シオニズムへの抵抗感をあらわにした(池田二〇〇四・六九―七〇)。

このように、社会経済的な差別を受けることはあるにせよ、法的にはユダヤ人も非ユダヤ人と同じ「市民」であるアメリカ合衆国においては、シオニズムはますますのこと少数派の突出した動きとなり、全体としてユダヤ人はイス

ラエル建設に対して消極的、慎重な姿勢を採っていた。同じように、自らに向けられる迫害・差別を「ホーム」の建設によって究極的に克服しようというシオニズムと同じ論理では、アメリカ合衆国でユダヤ人大学が設立されることは叶わなかった。人種・民族が溶け合う「るつぽ」を是とするこの国では、他のマイノリティおよび彼らの「平等」も包摂し、追求する必要があったからである。

その意味で、ブランダイス大学は、長きにわたって「祖国」建設を求め、また実際にイスラエル国が建設されるも暮らしの祖国をアメリカに定めたユダヤ人たちによって、「差別がなく少数派が生きやすい、社会的正義の実現のための理念のホーム」として建設され、成長していったといえるかもしれない。

「三つの祖国」の議論に照らすと、イスラエルは、ユダヤ人のルーツの祖国と呼ぶには離散状態があまりにも長きにわたってしまった。それゆえ彼らは、タルムード(口伝律法)を「持ち運べる祖国」とし、ユダヤ人という文化的共同体をルーツとした。イスラエル国は最初から居住を想定しない「遠きにありて思ふ」理念の祖国となったともいえる。実際、アメリカ・ユダヤ人のイスラエル移住の動きは目立たず、現在においても世界最大のユダヤ人口を擁するのはアメリカ合衆国である。そして、ブランダイス大学はシオニストらによって設立されたものの、ミニ・イス

ラエルとはならなかった。「約束の地」としてロシア・東欧からのユダヤ移民が目指したアメリカの平等、自由、正義を、暮らしの祖国以上に希求し実現できる場として、アメリカ・ユダヤ人の理念のホームとなった。

なお、公民権運動参加者の意識においてもイスラエルの位置づけはさまざまである。ある人物は、「イスラエルに一年間留学しラビになろうとしたが、女性であるために叶わず、帰国し公民権運動に参加した」と語った (Booth 2005)。また別の者は、イスラエルを支持せず、一九八〇年代にはユダヤ人によるパレスチナ支援団体の代表者を務めた。<sup>\*7</sup> こうしたユダヤ人大学およびイスラエルの位置づけ、そしてユダヤ人内部の多様性に鑑みると、アメリカ・ユダヤ人にとっての「三つの祖国」はあまりにも複雑に絡み合っていると言わざるをえない。

### ●注

- \*1 アメリカのユダヤ教には改革派、保守派、正統派の三つの大きな宗派がある。
- \*2 ハーバード大学における「割当制」を学術的に論じた研究としては、Karabel (2005)、Synnott (1979)、Steinberg (2001 [1981])、Pollak (1983) などがある。
- \*3 現在ではイスラム教の礼拝所も設けられている。
- \*4 ジェイコブ・コーエン (Jacob Cohen) 教授に対するインタビュー (二〇一二年五月八日) より。

\*5 『ニューヨーク・タイムズ』紙では八〇人、『シカゴ・トリビューン』紙では一一〇人と報道された (New York Times Jan. 9, 1969; Chicago Tribune Jan. 10, 1969)。いずれにしても、ブランダイスの黒人学生のかなりの部分が立て籠もりに参加したという。

\*6 ルイ・ブランダイスもシオニスト運動指導者であったが、彼自身は一九四一年に死亡しており、大学名に彼の名を使用することはゴールドスタインの希望とブランダイスの遺族の了解によるものであった (Goldstein 1951: 7982)。

\*7 アイラ・グルッパ (Ira Grupper) 氏に対するインタビュー (二〇一三年一月二日) より。グルッパ氏はジョージア州およびミシシッピ州で公民権活動に参加した。

### ●参考文献

- 池田有日子 (二〇〇四) 「アメリカにおけるシオニズムの論理——ルイス・ブランダイスに関する考察を通じて」『政治研究』五一号、五九—九二頁。
- 中島直忠・池田輝政 (一九七八) 「第二次大戦後の米国における高等教育政策——連邦立法を中心として」『九州大学教育学部紀要 (教育学編)』二四号、八三—九八頁。
- 野村達朗 (一九九五) 『ユダヤ移民のニューヨーク——移民の生活と労働の世界』山川出版社。
- 羽田積男 (一九九三) 「アメリカ型大学の創設とその教育——ユダヤ系の大学を中心として」『研究紀要』四五号、一九九—二一六頁。
- Booth, Heather (2005) Heather Booth statement. Jewish

- Women's Archive. Jewish Women and the Feminist Revolution, <http://jwa.org/feminism/html/JWA004.htm> (11月11日閲覧)
- Brandeis University, Office of the President, January 13, 1969 (Available at the American Jewish Archives, Cincinnati, OH).
- Garza, Hedda (1995) *African Americans and Jewish Americans: A History of Struggle*. New York: Franklin Watts.
- Goldsmith, Lynn (1968) Lynn Goldsmith Diary. Alumni Collections, Brandeis University.
- Goldstein, Israel (1951) *Brandeis University: Chapter of Its Founding*. New York: Bloch Publishing Company.
- Guérard, Albert (1956) The Three Chapels at Brandeis University. *The Standard*, March-April.
- Karabel, Jerome (2005) *The Chosen: The Hidden History of Admission and Exclusion at Harvard, Yale, and Princeton*. New York: Mariner Books.
- Kaufman, Jonathan (1995) *Broken Alliance: The Turbulent Times between Blacks and Jews in America*. New York: Simon & Schuster.
- Leventhal, Willey Siegel (2005) *The SCOPE of Freedom: The Leadership of Hosea Williams with Dr. King's Summer '65 Student Volunteers*. Montgomery, Alabama: Challenge Press.
- Meyer, Michal A., ed. (2008) *Joachim Prinz, Rebellious Rabbi: An Autobiography—the German and Early American Years*. Bloomington, IN: Indiana University Press.
- Newman, Louis I. (1923) *A Jewish University in America? With a Symposium of Opinions by Educators, Editors and Publishers, and a Bibliography on the Jewish Question in American Colleges*. New York: Bloch Publishing Company.
- Pasternack, Susan (ed.) (1988) *From the Beginning: A Picture History of the First Four Decades of Brandeis University*. Waltham, MA: Brandeis University Press.
- Pollak, Oliver B. (1983) Antisemitism, the Harvard Plan, and the Roots of Reverse Discrimination. *Jewish Social Studies* 45 (2): 113-122.
- Steinberg, Stephen (2001 [1981]) *The Ethnic Myth: Race, Ethnicity, and Class in America*, 3rd ed. Boston: Beacon Press.
- Synnott, Marcia Graham (1979) *The Half-Opened Door: Discrimination and Admissions at Harvard, Yale, and Princeton, 1900-1970*. Westport, CT: Greenwood Press.

● 著者紹介 ●

① 氏名……北美幸(きた・みゆき)。

② 所属・職名……北九州市立大学外国語学部・准教授。

③ 生年・出身地……一九七二年・福岡県。

④ 専門分野・地域……アメリカ史、アメリカ研究。

⑤ 学歴……お茶の水女子大学文教育学部(英文学英語学専攻)、九州大学大学院比較社会文化研究科(国際社会文化専攻)、メリーランド大学カレッジパーク校大学院(歴史学)。

⑥ 職歴……日本学術振興会特別研究員(博士後期課程在学中)を経て現職。

⑦ 現地滞在経験……メリーランド州カレッジパーク市(二〇〇〇年より一年間、留学)、ニューヨーク市(二〇一一年六月～七月、米国内務省の招聘プログラムによりニューヨーク大学客員研究員)、マサチューセッツ州ケンブリッジ市(二〇一二年三月～二〇一三年九月、ブランダイス大学にてフルブライト研究員および同大学客員研究員)。

⑧ 研究方法……二〇世紀前半に関する研究を行っていた時には文書館での史料調査を主要方法としていたが、最近は、元公民権活動家の同窓会への出席などにより得られた人脈を頼って聞き取りなども行っている。

⑨ 所属学会……アメリカ学会、日本アメリカ史学会、北米エスニシティ研究会、北九州アメリカ史研究会、九州西洋史学会等。

⑩ 研究上の画期……二〇一一年六月、ニューヨーク州での同性結婚合法化とその数日後に行われたニューヨーク市のゲイ・パレード。五〇万人の人出と通過するだけで三時間かかる五番街でのパレードに圧倒され、アメリカの多元性・多様性の究極の姿を突き付けられた思いがした。

⑪ 推薦図書……野村達朗『ユダヤ移民のニューヨーク——移民の生活と労働の世界』(山川出版社、一九九五年)。